



外科助教
津田康雄

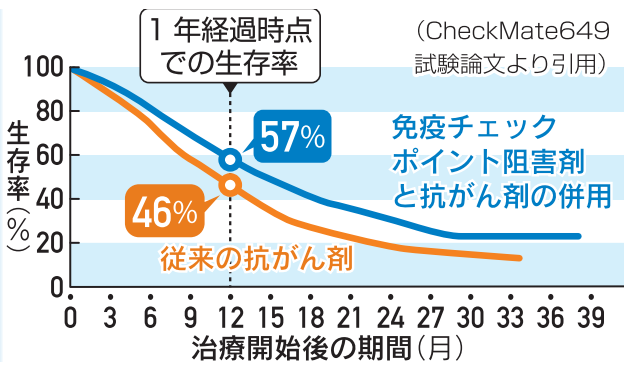
手術、免疫療法研究で成果

進化する胃がん治療

胃がんは健診の普及、ピロリ菌の除菌などによって年々減少傾向ですが、日本人のがん罹患数、死亡数の3位です。それでも胃がんの治療は少しずつ進化してきました。日本は胃がん診療の先進国であり、「胃癌治療ガイドライン」（日本胃癌学会編）は改訂を重ねて権威ある治療指針として活用されています。最近、ガイドライン変更に至る二つの興味深い臨床研究の成果が得られましたので簡単に紹介します。

一つ目の研究は進行胃がんに対する鏡視下手術適心です。切除できる胃がんは内視鏡治療か手術による治療が基本です。技術の進歩で早期胃がんの腹腔鏡手術は全国でされるようになりました。一方、進行した胃がんは鏡視下で、がん周辺のリンパ節を安全に取り除くことができるか疑問視さ

れていました。進行胃がんに対する腹腔鏡手術が従来の開腹手術と比べ、劣らなると証明するための研究が行われました。合併症などの安全性だけでなく、5年無再発生存率（手術後に再発せずに元気でいられる確率）が開腹手術の73・9%に対して、腹腔鏡手術は75・7%と劣らないことが証明されました。この研究は日本内視鏡外科学会が定める内視鏡技術認定医という資格を持つ腹腔鏡手術のエキスパートが執刀した症例を集めたものです。進行胃がんの腹腔鏡手術を受ける際は技術認定医の執刀、もしくはその指導のもとに受けることが望ましいです。現在は手術支援用のロボ



免疫チェックポイント阻害剤を併用した胃がん治療の効果

ットで、より精密な手術ができます。別府病院でも遠隔地から患者さんをロボットで手術する遠隔手術を目指して鋭意研究しています。

二つ目は胃がんに対する免疫療法です。胃がんの抗がん剤治療に関する研究です。切除できない胃がんもしくは再発胃がんには抗がん剤を中心とした薬物療法が一般的です。さまざまな抗がん剤が登場しましたが、最初に使う薬剤（一次治療）においては最近50年間、大きな変化はありませんでした。しかし、「免疫チェックポイント阻害剤」が登場し、従来の抗がん剤と併用することで高い効果を発揮することが、世界各国とアジア共同で行われた2種類の試験で証明されました。別府病院でも抗がん剤の効果、がんの再発を予測するターゲットを見極めることなどを日々研究しています。

科学進歩のスピードは目覚ましく、昨日まで治療困難だった症例も今日からは治療可能になることもあり得ます。胃がんに対する安心の治療はもちろん、最新の正しい医療知識を身に付けてもらうためにも、悩まずに医療機関へご相談ください。

質の高さ、安全性を証明